書籍紹介

『大人のための動物園ガイド』

成島悦雄 編著

2011年2月　養賢堂　発行

233頁

定価（本体1,800円＋税）

吉田圭太・浅川満彦（酪農学園大学獣医学群）

酪農学園大学野生動物医学センターWAMCは，本学会指定の寄生蠕虫症センターとして，動物園水族館（以下，園館）からの寄生虫病の診断や疫学などを引き受けている。しかし，こういったせっかくの依頼を単なる業務としてこなしていては，知的営みから乖離した作業に陥ってしまう恐れがある。そうではなく，これらは依頼園館と共同で，彼らの役割である研究や保護，あるいは教育の営みと見なしている。このことを所属ゼミ生，特に，この分野に強い志向を示すものに理解して頂く一助として，園館関連書籍を読み込み，その書籍紹介（あるいは書評）を本ニュースレターに投稿をすることを推奨してきた。これに応えてくれたものは浅川と共著の拙文として結実した（水主川・浅川2010，森・浅川2011，佐渡・浅川2014，竹内・浅川2012）。本書評拙文の著者の1人，吉田も動物園勤務を望んでいるようなので，今回，本書の全体的な分析を行い，浅川が印象的な部分を補足することにした。なお，本書発行元は，畜産・獣医系の教科書を数多く世に送り出していることでよく知られる。（文責 浅川）

本書は「動物園の大人の味わい方」，「動物を飼育する」，「動物を集める」，「動物を展示する」，「動物を増やす」，「動物園の社会学」，「動物園の過去，現在，未来」の7章から構成されている。章「動物園の大人の味わい方」は序論として，動物園解説員の仕事をしている著者から大人ならではの楽しみ方が紹介されている。動物のそばに書いてある説明は動物図鑑や百科事典の説明とは一味違うことや，キーパーや動物解説員のガイドに耳を傾けること，大人向けのツアーや動物園主催の野生動物シンポジウムへの参加を提案している。章「動物を集める」において，日本では国際情報機構（ISIS）に加入している動物園と水族館が非常に少ないことが指摘され，ISISの動物情報管理システム（ZIMS）への加入率が低い大きな原因として言語の壁を挙げている。ZIMSに参加することで国際社会において野生動物の保全に大きく貢献できるようになるため，今後，日本では動物園においても英語力に秀でた人材が求められることになるだろう。こうした現状も動物園就職希望者は頭に入れておきたい。章「動物を展示する」では，擬岩や擬木を用いて自然に近い景観を再現した生態展示や，動物本来の行動や能力を見せることに主眼をおいた行動展示などについて述べているが，具体的な動物園名を挙げて紹介しているため，そうした取り組みも身近に感じられた。本書では娯楽・自然保護・教育・研究といった動物園の役割についてのみならず，社会学や歴史・未来像についてまで各章ごとに詳しく述べられている。写真も多く親切であり，この1冊が多くの読者にとって動物園という施設のガイドになるであろう。

獣医学部に所属する自分が個人的に注目したのは章「動物を飼育する」の動物園動物の臨床の項だ。まず，野生動物である動物園動物の習性が飼育係や獣医師にとって厄介であることが実際の臨床例を挙げて紹介されており，興味深い。一方，伴侶動物や生産動物に比べると動物園動物の臨床例は非常に少ないことを指摘し，飼育管理や疾病に関する論文の共有や，ISISへのデータの蓄積が今後の動物園動物医療にとって重要であると述べている。「動物園にある動物病院の施設は大学に比べれば十分ではない。難しい症例に出会った場合，自分たちの勉強もかねて大学の先生に応援を求めている」ように，データの蓄積とともに専門分野を扱う大学の研究室と連携を深めていくことも重要であろう。動物園動物の臨床教育を大学のカリキュラムに取り入れることは現実的ではないかもしれないが，学生が少しでも関わることのできる機会を増やすことが将来の動物園動物医療の発展につながるのではないだろうか。（文責 吉田）

自分のゼミ生から，直接，動物園展示動物臨床における大学に対する悲観的な感想を得ることができた。皮肉でもなんでもない。こういったことを知ることができるので，本拙文のような共著書評作りは，大変有意義なのである。それにしても，本当に，大学は望み薄なのであろうか。いや，そのようなことは無い。国外に目を向ければ，関連専門職大学院は存在する。実際，本書でも随所で紹介のある近代動物園の始祖，ロンドン動物園およびロンドン大学とで共同で開講しているMSc of Wild Animal Health課程がそうである（古瀬・浅川2014，田中・浅川2014）。本書内では，このコースについては言及されてはいなかったが，姉妹コースMSc of Wild Animal Biology含め，この本が想定する読者のオトナにも，十分，興味を持って頂ける教育機会である（浅川の在籍年齢は40～41歳。ミドルエイジからも進学希望者が続出するかも）。本書改訂版のおりには，是非，このコースについてもご紹介頂きたい。もちろん，進学となると，本書の様々なところで言及され，かつ，吉田も読み取ったように，英語が重要なスキルとなるのは自明である。それはともかく，若い学生さんは，

きっと，将来は，国内の大学でも同様なコースが出来る（作る）と信じ，研鑽を積んで欲しい。

さて，吉田のみならず，獣医学徒ならば臨床に興味がわくのはよく判る。臨床の部分はたった5頁ほどの内容であったが，非常に示唆的な記述に満ち溢れていた（詳しくは書かない。一読すべき）。されど，One healthの観点から本書を読み込むと，彼が指摘した項目のほか，自主検疫や感染症対策はもちろん，繁殖や域内保全なども参考になる。本書名が指すオトナを国民一般とするのならば，One health概念の敷衍，啓発としても本書は有効な契機となったであろう。もし，改訂版を出されるのなら，この点も強調もして頂きたい。

もう一点。吉田が印象深いとしたものが大学（研究室）との連携についてであった。ゼミ生としては，たった2か月余りの忙しい研究室（WAMC）経験ではあったが，おそらく実感として捉えたのだろう。だが，指導教員としては，より銘記して欲しいのが，「多くの研究者は動物園を研究材料の無料草刈場と考えている」であった（216頁）。場は違うとはいえ，命懸けで採材をしている浅川の経験からも，この園館人の痛く口惜しい気持ちが溢れる言説は，理解出来うる。これをお読みの方々も，是非，記憶して欲しい。

若い学問分野である野生動物医学は，研究と同時に，その研究の意義の啓発を同時進行しなければならない。そのために，浅川のゼミ生たちは，獣医の卵たちによる動物学の公開講座を行うことが義務付けられている（詳細は「獣医の卵たち」で検索）。その講座の目玉が，授業後半で様々な標本（多くが触れられる）を用いた実物解説である。本書でも「毛や羽，角，餌や糞などといった標本を出店のように並べて説明」（35頁）とある。野生動物医学の敷衍のために始めた公開講座だが，実は，園館の職業訓練も兼ねていたようである。（文責 浅川）

文　献

古瀬歩美, 浅川満彦. 2014. 英国野生動物医学および生物学専門職大学院修了者向けニュースレター上に見られる関連分野の最新職域動向. 畜産の研究, 68（5): 526-534.

水主川剛賢, 浅川満彦. 2010. 書籍紹介『Wildlife Pathology: Short Course Taronga Zoo August 08』. 野生動物医学会ニュースレター, (30): 31-32.

城戸美紅, 浅川満彦. 2014. 書籍紹介『日本の水族館』. 同上, (39): 33-34.

森 昇子, 浅川満彦. 2011. 書籍紹介『動物園学』. 同上, (33): 36-38.

佐渡晃浩, 浅川満彦. 2014. 書籍紹介『動物園学入門』. 同上, (39): 32-33.

竹内徳余, 浅川満彦, 2012. 書籍紹介『新版水族館学』. 同上, (35): 26-28.

田中祥菜, 浅川満彦. 2014. 英国MSc WAHおよびWAB修了者向けニュースレターに見る野生動物医学進路動向（博士課程，ポスドク，生涯教育など）. 同上, (38): 14-18.